

民族派の文学運動

影山正治

大東塾出版部

著 作 權 所 有

民族派の文学運動		定價二〇〇円
昭和四十年三月二十五日	初版	
昭和五十四年十二月二十五日	四版	
著 者	影 山 正 治	
発行者	東京都港区北青山三―三―二七 鈴 木 正 男	
印刷所	東京都港区北青山三―三―二七 大 東 塾 印 刷 部	
発行所	東京都港区北青山三―三―二七 大 東 塾 出 版 部	電話(03)〇九六三

序

一、この本の書きはじめは、昭和三十四年の暮であつた。翌三十五年正月号の雑誌『不二』に才一回分が載り、爾来極力連載に努め、満五年以上を経過した今日、五十回を越えてなほ続稿中である。あと十回足らずで終らしたいと思つて居る。

一、この上巻に収めたのは、昭和三十五年正月号から三十七年十一月号に至る二十八回分で、それ以後最終回までの分は下巻として遅くも明春までには刊行したい意嚮である。

一、雑誌連載の原題は「日本浪漫派の問題」で、この問題をつとめて広い意味で考へようとしたものであるが、書き進めて居るうちに、はじめの予定より遙かに広く狭義の日本浪漫派V以前に於ける諸多の民族的文学運動の面をも、また、特に以後に於ける日本主義文化同盟(後に文化維新同盟)、新国学協会、不二歌道会等による民族的文学運動の面をも考察することとなり、原題のままでは、一つの昭和民族主義文学運動史の様相をもつに至つた本書の内容を充分表現し得ないうらみが生じたため、新たに『民族派の文学運動』なる書名を選び、原題の「日本浪漫派の問題」を副題にすることとした。

一、この本を書く直接の動機になったのは杉浦明平の存在であつた。ようやく特異な日共系作家として注目を集めはじめて居た杉浦が、問題作『細胞生活』を出したのは昭和三十一年九月のことであつたが、たまたまこの作品を読み、且つ調べた結果、昭和二十四年一月日本共產党に入党したと云ふこの党員作家杉浦明平氏が、大正末年から昭和初年にかけて愛知県立豊橋中学校に学んだ僕の二級下に居たあの文学少年杉浦明平君と同一人物であることがはじめてわかつた。

一、しかし、僕には、家柄も人柄もいいあの浪漫主義的な文学坊つちやん杉浦明平君のイメージと、相当人をくつたこの現実主義の党員作家杉浦明平氏のイメージとが仲々結びつかないので、一つの深い興味を感じ、急いで杉浦氏のほとんどすべての著作に目を通した。その結果、僕などまでをも含めた極く広い意味での日本浪漫派に対する杉浦明平君の異常なまでに激しい憎悪ぶりを知つた。

一、そして、そのいちばんの焦点が保田与重郎氏に向けられ、「成上りの御用商人」「戦争屋」「ベテン師」「狐つき」「悪名高き剽竊漢」「ごろつき」「アジア的ファシスト」「思想探偵」「参謀本部お抱えの公娼」「ミリタリストや国民の敵たちと一緒に宮城前の松の木の一

本々に吊し柿のように吊してやる」等と罵つて居るのを見て、これはひどい、何とかしなければなるまいと云ふ公憤を覚えた。そして、これがきつかけとなつて、できるだけ広く終戦後に於ける文学界、思想界の日本浪漫派観を調べることとなつた。

一、それから数年間、日本浪漫派批判の口火を切つたと云はれる昭和二十六年に於ける竹内好氏の諸論文から、三十三年三月号以来六回にわたつて雑誌『同時代』に連載された橋川文三氏の日本浪漫派批判の諸論文（三十五年二月刊『日本浪漫派批判序説』に収録）に至るまでの広般な文献を調べた結果、本文でも云つて居るやうに、そのすべてが民族性、土着性を無視したかたよつた否定論であり、そこに、このままでは大きく後世をあやまらしめるであらうやうな、黙視できない幾多の大きな歪曲や、誤解や、見当違ひのあることを身にしみて発見したので、これは、若い人々のためにも、後世のためにも、自分自身の實際の体験を中心に、あくまで事実を事実とし、真実を真実とする極力詳細で総合的な、杉浦明平氏そのものをも含めての日本浪漫派批判に対する批判を書いて見ようと思ひ立つたわけで、これがこの本に手をつけた当初の事情であり、且つこの本が杉浦明平論から始つて居る理由である。

一、したがつて、この本の念願するところは、一つには、過去の民族的文学とその文学運動の

実相を明らかにする点にあるとともに、同時にまた、いま一つには、将来への民族的文学とその文学運動興起のための一つの口開きたらしめたい点にあるわけである。

一、この点につき、安保動乱の年として知られる昭和三十五年の初めと云ふ時点に立つて、この本の本文は次のやうに述べて居る。

「ここで特に注目されることは、文学史の面がいちばんおくれてゐて、昭和文学の通史としては、いまなほソ連的共產主義の系統と、欧米的自由主義の系統とに属するものしか現れてゐず、日本的伝統主義に立つものは全然見られない。これは、日本主義文学傾向の一つの大きな基盤を為してゐた人広義の意味での日本浪曼派Vの復活がいまだに為されてゐないことと深い関連があるであらう。それを必死に喰ひとめて居るのが今の人民戦線の文壇主流と、その友軍たる一般ジャーナリズムであるが、しかし、キサシはすでに色々の形で動きはじめて居る。必ず近く大きな轉換が、このいちばんおくれた面にも起つて来るにちがひない」

一、その大きな轉換は、それから四年目の昭和三十八年に始つた。それは、正月から『朝日新聞』の文芸欄を林房雄氏が担当し、三島由紀夫氏の「林房雄論」の出た同じ『新潮』二月号から保田与重郎氏の「現代畸人伝」(翌三十九年十月単行本として刊行)が連載されはじめ、

『中央公論』の九月号から林房雄氏の「大東亜戦争肯定論」（翌三十九年八月単行本として刊行）が連載されはじめたと云ふ事実を中軸として始つた。そして、それと平行して、「杉浦明平論」が明らかに指摘したやうな同氏及び同氏等に於ける人細胞生活Vと人日共心情Vの崩れが、次第に露呈されはじめて来た。おほよその見当は違つてゐなかつたやうである。

一、下巻に於ては、終戦時までができるだけ詳しく、終戦後は極く概括的、重点的に述べられるはずである。したがつて、僕自身の歩みに關して云へば、この本の主内容を為すものは、『一つの戦史』（既刊）から『老兵始末記』（未刊）にかけての間であり、一部『千里行脚の記』（既刊）にかかると云ふことが出来る。これら諸作を併せ読まれれば、更に理解を深めることが出来ると思ふ。

一、この書を成すに当り、資料提供の上で御世話になつた諸友は甚だ多い。そのうちでも、東京の並木陸郎、宮川悌二郎、愛知の大竹毅、広島佐々木寛幸、大分の緒方武亜君らには特に御世話になつた。また編輯の上では鈴木正男君、印刷の上では森岡榛一君に大変苦勞をかけた。心より厚く御礼を申し上げたい。

一、この上巻を、何よりもまづ、来たる三月二十九日執行の『ひむがし』（新国学協会）物故

同人倉田百三、藤田徳太郎、大鹿卓、大賀知周、尾崎士郎五大人慰靈祭に当り、謹んでその靈前に捧げたいと思ふ。願はくは、諸靈、今後の、長き、きびしき我等の「道の戦ひ」の上に昭々の照覧と加護を垂れたまはむことを。

昭和四十年二月下浣

影 山 正 治

民族派の文学運動

目次

序

序一章 序章・杉浦明平論……………	一
序二章 昭和文学史抄記……………	四
一、昭和の文学……………	四
二、プロレタリア文学……………	四
三、昭和の批評文学……………	三
四、昭和の日本主義文学……………	三
五、日本浪漫派……………	五
序三章 広狭両面の日本浪漫派……………	五
一、日本浪漫派批判の歴史……………	五
二、日本主義の魅力……………	三
三、「右翼雑誌」論議……………	七

才四章 日本浪漫派系の雑誌	一〇五
一、『コギト』の問題点	一〇五
二、『公論』の問題点	一一九
三、『文芸日本』の問題点	一二三
四、『文芸文化』の問題点	一四二
才五章 わが日本主義文学運動	一四六
一、日本主義芸術研究会	一四六
1、同人雑誌『孤独』	一四六
2、同人雑誌『豊橋文学』	一五〇
3、松永教授の『日本主義の哲学』	一五五
4、日本主義芸術研究会の結成と運動	一六二
5、二つの論文	一八九
6、全国大日本主義同盟の出現	一九二
7、『若き日本主義芸術のために!』	一九四

8、シナリオ「前哨」	100
9、嵐の中の全日同盟	101
一二、日本主義作家同盟準備会	102
1、日本主義学生運動の概要	104
2、昭和五年度文壇総評	111
3、満洲国視察旅行	115
4、大同倶楽部の結成	117
5、『維新国防論』の執筆	118
6、日本主義作家同盟準備会の出現	121
7、『日本主義文学』準備号	124
8、一つの小論文	124
三、日本主義文化同盟（上）	129
1、神兵隊事件と獄中生活	129
2、父親の三つの文章	131

3、	「影山正治君の追憶」……………	二五
4、	「獄中記」より……………	二六〇
5、	「獄吟集」より……………	二六四
6、	維新寮の結成……………	二六七
7、	歌集『悲願集』……………	二七五
8、	二・二六事件後の合同運動……………	二八三
9、	純正維新共同青年隊の結成と解散……………	二八五
10、	日本主義文化同盟の結成……………	二九三
11、	発足当初の諸点……………	二九七
12、	機関誌『怒濤』の出發……………	三〇一
13、	当時の三つの文学論……………	三〇六
14、	「林房雄論」……………	三一五
15、	「徳永直論」……………	三三三
16、	「中河与一論」……………	三三九

17、	『怒濤』一周年記念号……………	三四七
18、	神兵隊公判の開始……………	三四四
19、	中村武君の書簡……………	三四九
20、	『悲涙エチオピアを想ふ』……………	三六三
21、	銃後全国農民大会……………	三六八
22、	滿支視察旅行……………	三七三
23、	青年俱樂部の結成……………	三七七
24、	文芸春秋社糺彈運動……………	三八二
25、	「文壇の再建」……………	三九三
26、	三つの文学維新論……………	四〇八
	『不二』掲載の年月表……………	四二三
	再版の言葉と訂正……………	四三三

才一章 序章・杉浦明平論

其の一

杉浦明平の『細胞生活』が出たのは昭和三十一年九月のことであつた。杉浦明平は、云ふまでもなく日本共産党の黨員作家である。その入党は昭和二十四年一月と云ふから、この作品が出るまでの黨員生活は七年余、その間に『ノリソダ騒動記』（二十八年）、『基地六〇五号』（二十九年）、『台風十三号始末記』（三十年）など、愛知県渥美郡福江町（今の渥美町）なる彼を中心とする日共細胞の諸活動を題材とした一連の実録小説風の特異なレポータルジュを刊行して、次第にその実力をみとめられはじめてゐた。『細胞生活』もその連作の一つで、彼の入党以来、特に翌二十五年

のコミンフォルム批判、党幹部追放、朝鮮動乱勃発以来、三十年「六全協」による戦術転換に至るまでの日共中央のばかけた内部抗争と、くだらん極左冒險主義とが、この「日本の岬の果て」の一細胞に如何にあはらしい悲喜劇をもたらしただかと思ひきり詳報したもので、時が時であつただけにその内容に対する資料的興味も深く、且つは日共の黨員作家にはめづらしい明るいユーモアと、深い人間味と、淡雅な筆致とがこれにプラスして非常に大きな反響を呼び、一躍、彼の存在を不動のものたらしめた。

さて、この今は名高き日共の黨員作家杉浦明平が、実は僕の中学時代、二年下級に居た紅顔可憐の文学少年杉浦明平君と同一人であることをはつきりと自覺し

たのは、この『細胞生活』を興味深く読んだ時のことであつた。この本を読んで居るうちに、僕はいつとなく中学時代の杉浦少年を連想しはじめた。それは、明平（みんべい）と云ふめづらしい名前からも、また出身地が近いと云ふ点からも、時代が似かよつて居ると云ふことから来たが、いま一つには徹底したプロレタリア・レアリズムに貫かれて居るべきはずの『細胞生活』が、どことなく文学少年的なロマンテイシズムの乳香をただよはせて居ると感じた点からも来たであらう。これは、べつに茶化したり、からかつたりする意味ではない。いい意味で、杉浦明平の存在が、日本共産党員として、また日本共産党の党員作家としてどことなく異質的な感じをもつたからである。

そこで母校愛知県立豊橋中学校（今の時習館高校）の校友会名簿を取り出し、僕より二期後輩の嘗ての杉浦明平少年の項を繰つてみると、『細胞生活』に出て

居る著者の住所と最終学校とが同じで、職業が「著述業」とある。ここに於て両者が完全に同一人であることを確認し得たわけで、感慨甚だ浅からざるものがあつた。その杉浦君ならば、中学三年の當時をよく知つて居り、どう考へても後年共産党員にならうなどとは夢にも思へないやうな、ひねくれたところのない、人のよささうな、根の明るい坊つちやん生徒と云ふ感じの文学少年だつたからである。

念のために、僕の自伝的作品『一つの戦史』をひもといてみると、昭和四年二月五日の項に、校友会誌編輯のことが出てゐて「仲々いい作品がある。三年S君の△秋風の吹くまで▽、四年S君の△旅の天才の話▽などは特にすぐれてゐると思ふ。昨年の会誌には△別離▽と題する五郎、十郎に取材した戯曲風なものを書いた。今年は△兎と亀▽と題して、童話に取材した戯曲を載せることにした。その他に短歌少々と作文。作